



くさなぎ あつこ
草薙厚子

著 「子どもが壊れる家」

評・村上 純子 (聖学院大学非常勤講師)

著者は、法務省東京少年鑑別所の法務教官を退職後、少年犯罪のジャーナリストとなった方です。著者はこの本の第一章で、近年の少年少女犯罪の社会的背景を分析し、「普通」の家庭で犯罪が起きているのは、家庭の弱体化と学校教育の限界が背景にあると指摘します。

第二章では、神戸児童連続殺傷事件を始め、4件の少年少女犯罪事件を取り上げ、加害者の家庭背景などを詳しく分析しています。それらは読んでいるだけで、心が痛みます。

さらに第三章では、それぞれの家庭でどのような問題があったのかを解説しようと試み、家庭の「過干渉」と、ゲーム、パソコン、テレビ、ビデオ、インターネットなどの「メディア」が脳に及ぼす影響に問題があるという結論を提示しています。

過干渉とは、あれこれと口うるさいとか、しつけが厳しいというだけではなく、「不必要なところで子どもを管理し、おもちゃにすること」であり、その結果、子どもは自分が否定

されていると感じ、親に要求される「いい子」を演じながら、こころの中に「もう一人の自分」を隠していくのではないかと著者は述べます。

また、子どもたちが死を理解できなくなっていることや、共感性のなさ、コミュニケーション能力の欠如を、「メディア」が助長しているのではないかと、そして特にゲーム脳の与える影響について述べ、第四章では、子どもに自分の理想を押し付けられないこと、そしてゲームやインターネットなど「メディア」を管理することを提言しています。

* * * * *

この本の結論は、やや断定的に著者の直感、感覚によって出されている感もありますが、そこには私たちが聞くべき示唆も含まれているように思います。

「今の子どもたちは変わってしまった」ということはをあらわにこちらで聞きますが、私は、臨床心理士として子どもたちと接していると「愛されたい、認めて欲しい、自分の感情に素直に生きたい」と

いう子どものニーズやあり方そのものは、昔から何も変わっていないと思います。

しかし、私たち、とりわけ子どもたちを取り巻く環境が劇的に、そしてものすごい速度で変化していることは事実でしょう。そして、この環境の変化に伴って、子どもたちの自己表現や、感情表現の仕方、ことばなどが変化しているとしても何ら不思議なことではありません。

子どもたちの環境を変えさせているのは、私たち大人ですから、「子どもたちの変化」は大人の責任です。「子どもが変わってしまった

た」と嘆くのではなく、ひとりひとりの大人が、自分が接することができる子どもにもどう関わろうとするのか、どう彼らのニーズを読み取って、成長を支えていこうとするかがカギとなるでしょう。

この本の最後に医療少年院の教官の話が出てきますが、この教官のように「あなたは大切な存在である」という心からの愛情と、「大切だからこそ、あなたをしつかりと叱る」という毅然とした態度の両方で、子どもと向き合っていくことが大切なのではないかと思えます。



「子どもが壊れる家」

文春新書 189ページ 735円(税込み)

ファミリー・フォーラム・ジャパンでは扱っていません